

い対する丘陵上にも城館跡群が分布している。大字三山木に属す南山の城跡は、最近まで水をたたえた堀の一部をよくとどめていた。近くの民家の整地中に、室町時代から安土・桃山時代にかけての土師器や陶器の碗・皿が出土している。

田辺町教育委員会が発掘調査をした口駒ヶ谷遺跡は、かつて一之木戸と呼ばれた普賢寺谷の開口部に近く、室町時代の建築跡が確認された城館遺跡で、都谷中世館跡の対岸に当る。

京都府埋蔵文化財研究センターが発掘調査した遺跡も中世の城館跡である。普賢寺の西側を通る国道24号線のバイパス工事で姿を消した。厚生年金保養センターなどで消滅した遺跡も含めて、普賢寺谷の中世城館跡群は次々に失なわれていく。

それだけに、同志社田辺校地内で保存されている遺跡群の学術上の価値は高い。中世史の舞台が、遺跡という歴史の生き証人として保存緑地とともに息づいている。

(大学校地学術調査委員会調査主任)

同志社校地出土の埋蔵文化財(10)

鈴木 重治

柿右衛門手色絵皿



(江戸時代)
(新島襄旧邸出土)
径20.8 cm

鶺鴒に梅竹文を配したもので、繊細な筆法による染錦で飾られている。いわば多彩色に金彩をあしらった染錦手の装飾は、十七世紀後半から十八世紀にかけてヨーロッパでもはやされたいわゆるオールド・ジャパンに通じるものである。

老梅の幹にみる力強い屈折した曲線と、しなやかな竹のすんなりと延びた曲線の組み合わせを大きく右側に配して、左側にはたわなに実った粟の穂の下に、丸々とした鶺鴒を遊ばせている。長時間土中にあつたために剝落している金彩が、部分的に梅の花や竹の葉に残っていて、赤絵や下絵の呉須の青を引き立てている。

中国の景德鎮産の磁器に代って、伊万里焼の色絵磁器がオランダの東インド会社によってヨーロッパに運ばれ、当時のシノアズリーに答えたが、それらの中に粟鴉図の色絵皿があることが知られている。一羽の鶺鴒を青く画くのがヨーロッパ特有の柿右衛門写しとされており、ドイツのマイセン窯、イギリスのウースター窯やチェルシー窯などで焼成された柿右衛門写しの本歌が、この出土資料によって想いおこされる。

一九八四年の夏から秋にかけて、新島襄旧邸の一部を発掘調査した。校友会館の改築に伴う事前の発掘調査であった。その際に多量に出土した陶磁器のうちの一点が、この柿右衛門手色絵皿である。

見込部の文様、つまり内面の図柄は、栗

(大学校地学術調査委員会調査主任)